

(17) 小松・梯川の水際環境の現状と将来への提言

THE CURRENT WATER'S EDGE ENVIRONMENT OF THE KAKEHASHI
RIVER AND PROPOSITIONS FOR THE FUTURE

*
中川武夫

*
Takeo NAKAGAWA

ABSTRACT;The current water's edge environment of the Kakehashi river in Komatsu has been critically reviewed on the basis of the literature survey and field study.

It is realized that the water's edge environment is far superior to that of rivers flowing through the big cities such as Tokyo and Osaka in Japan, and is still keeping an excellent ecological system consisting of animals, plants as well as human beings. There are many forests and buried cultural properties around the river. Each of the forests normally belongs to the shrine that has been the centre of the people's belief and life, whereas the distribution of the buried cultural properties reflect the sphere of their activity since the 2nd century or more ancient time.

It is strongly recommended to preserve the water's edge environment of the Kakehashi river including a valuable shrine Komatsu-temmangu, the forests and the buried cultural properties for the further development of the characteristic culture in Komatsu, where Komatsu-temmangu was founded by the third dynast of Kaga-han, Toshitsune Maeda in 1657 and was designated as a national important cultural property in 1961. Hence, any countermeasure for the flood contradicting to these propositions must be modified so as to meet them or the alternative countermeasure must be newly considered.

KEYWORDS;Environment, River, Forest, Cultural Property, Ecology.

1. はじめに

古来、紫山潟、今江潟および木場潟を総称したいわゆる加賀三湖は図-1「小松殿中写之」(嘉永四年1851)からも明らかなように梯川流域に属していた。これらの三湖はいずれも古墳時代の砂丘移動によって従来、入江あるいは湾であったところが外海から切り離されることによって湖沼化したものであって、周辺の地勢は極めて平坦な低湿地帯となっている。紫山潟は串川によって、木場潟は前川によってそれぞれ今江潟と通じ、今江潟からの水は旧梯川を流下したのち梯川に合流して安宅を経て日本海に注いでいた。当時の梯川河口付近の流路は現在のそれとは異なり、上牧付近でいったん左折し向本折にいったのち、今度は右折し安宅に続いていた。また、図-1には現存しない手取川から梯川へ流入する流路や軽海と向本折との間を結ぶう回流路も認めることができる。さらには、梯川右岸の梯付近には小松天満宮を周回したのち、上牧付近で梯川に合流する流路も認められる。このように当時の梯川および支川は低湿平野を縦横無尽に蛇行し、小松天満宮は三方を流水によって縁取られた森の中にあった。

梯川がその周辺に住む人間と密接に係わり合ってきた時代は明治四十四年(1911)十一月に着工された改修工事によって終えんを告げた。この工事の内容は屈曲の著しい下牧と鶴ヶ島の間を開削し、延長4kmの河道区間を1.1kmに短縮し安宅河口に向けてその河道の直線化をはかったもので、大正十二年(1923)に竣工している。続いて、安宅河口から白江大橋の間を昭和十一年(1936)に、白江大橋から上流6.5kmの間を昭和十八年(1943)にそれぞれ連続堤防が築かれ現在にいたっている。

本論文においては梯川の水際環境の現状を文献調査および現地調査に基づいて概略紹介する。続いて、これらの調査結果をふまえて将来における梯川の水際環境保全の見地からいくつかの提言を行う。

2. 梯川の水際環境の現状

図-2に梯川流域の概要図を示した。¹⁾ 梯川は石川県小松市の鈴ヶ岳(標高1074m)に発し、山かいを北上し、右から西俣川、郷谷川、湊上川を合わせ中海付近で平野部へ出る。平野部へ出たからの梯川は左方へう回・曲流しつつ、右から仏大寺川、鍋谷川、八丁川を合わせたのち国の重要文化財である小松天満宮(図-3参照)を右に見ながら小松市街地北部を西方へ流れる。さらに、梯川は左から木場瀧に発する前川を合わせ、弁慶・義経の勧進帳で有名な安宅関址(図-11参照)を左に見ながら日本海に注ぐ流域面積271.2km²、流路延長42kmの河川である。また、梯川は鍋谷川との合流点から河口までの平均河床勾配が3500分の1程度の典型的な緩流河川である。

続いて、堤内地と堤外地に分けて梯川の水際環境の現状について概略のべることにする。まず、図-4から図-10に河口から上流12km付近から河口までの堤外地の状況を上流から下流に向かってほぼ2km間隔ごとに示した。図-4に示された河道区間は人工の手が未だほとんど加えられたことのないこともあって、河辺にはすすき、杉などが茂り、右岸側には雪におおわれた寄洲も見られる。図-5に示めされた付近は流路の屈曲が最も激しい河道区間であり、川の水は中洲を両側からはさむように2本の水路に沿って流れている。コンクリート護岸は左岸水衝部のとくに洗掘の激しい部分を除いて施されていないので、堤外地の植生は比較的良く保存されている。図-6においては水面で戯れる鳥の群さえ認めることができ、この周辺の水際環境の良さを示唆している。両堤防ともに蛇かごによって部分的に補強されている。図-7に向って右側から梯川へ流入するのが八丁川であり、この堤防には美しい花が咲き乱れている。また、梯川左岸の後背地には堤防に隣接して民家が立ち並んでいる。図-8は梯川下流部におけるボートの練習風景を示している。また、右岸堤防の一部が蛇かごによって補強されているのを認めることができる。図-9には北陸で唯一の「せいたかよし」の密生地を示した。図-10においては右岸側に多数の栈橋およびこれらに係留されているボートを認めることができる。また、橋の背後のうつそうたる森は安宅住吉神社である。図-11には住吉神社の神域の一角にある安宅関址を示した。図-12は堤防を降りて寄洲上で水と親しんでいる子供達の様子を図した。図-6、図-8およびこの図からも梯川の水際が依然としてその周辺に住む人間の生活空間と一体をなしている状況をうかがい知ることができる。

次に堤内地の状況であるが、ここには小松天満宮(図-3参照)、小松城址(芦城公園)、安宅関址(図-11参照)といった日本の代表的な文化財、名所・旧跡が散在しているのみならず鎮守の森、埋蔵文化財包蔵地等も多数分布している。図-13に旧小松・安宅・牧・御幸地区における鎮守の森分布図を示した。これらの地区を合わせて32箇所もの鎮守の森があり、それぞれの森が人間と自然との絶好のふれあいの場となっている。一方、図-14には梯川と鍋谷川との合流点周辺の遺跡分布図を示した。この図から、加賀国府推定地域である古府町を中心として梯川と鍋谷川の川筋に遺跡が集中的に分布していることが理解できる。

3. 梯川の水際環境の将来への提言

明暦三年(1657)加賀三代藩主前田利常公によって創建された由緒ある小松天満宮は昭和36年(1961)に国の重要文化財に指定された。小松天満宮はその所有者であり、かつ管理責任者である宮司はもとより、日本国民の一人一人が祖先から継承したかけがえのない至宝である。かかる国宝を適切に保存し、次の世代に伝えることは現代に生きるわれわれに課せられた重要な使命の一つである。また、現代および将来に生きる人々は秀れた実物資料である小松天満宮と接することによって必ずや高まちな精神と新たな活力をかん養されるにちがいない。小松天満宮を過去328年間の長きにわたり戦乱あるいは天変地変から守ってきたのは日本人に限らない。たとえば、第二次世界大戦当時の米国國務長官コーデル・ハル(Cordell

H u l l) 氏らの尽力により小松天満宮を含む小松市内の文化財が米軍による爆撃をまぬがれたことは歴史の教えるところである。敵の米軍でさえ爆撃をはばかったほど普遍的価値のある小松天満宮を河川改修の名のもとに今まさに日本人自らが葬り去ろうとしていること¹⁾に対して強い疑念と憤りを感じるのは筆者一人だけではあるまい。

現在、建設省¹⁾、石川県、小松市⁶⁾を中心に梯川水系の水害対策の検討が行われているが、梯川の水際環境を将来にわたって良好な状態に保つ必要上、水害対策の実施にあたって留意されるべき主な点を次に列挙する。

- (1) 国の重要文化財である小松天満宮および神域の移転はもとより、これらの現状変更を最小限に留めること。
- (2) 現在の良好な梯川堤外地の水際環境を可能な限り保全すること。
- (3) 鎮守の森の中にある建造物⁶⁾はもとより、その神域には生息する動植物を歴史的見地から可能な限り保存すること。
- (4) 梯川と支川の川筋に集中的に分布している埋蔵文化財包蔵地の掘起こしを最小限に留めること。
もしもこれらの留意点を満さないような梯川水系に係わる水害対策の計画¹⁾がある場合には、これらを満すように計画の修正あるいは代替案の検討がなされなければならない。

4. 結 論

ナイル川、黄河などの流域に栄えた古代文明にその例を求めるまでもなく、文明は川とその周辺に住む人間との係わりを通じて生まれ、発展していくものであることは歴史の教えるところである。逆に川のほとりに栄えている文明があったとしても、なんらかの理由によりその周辺に住む人間と川との係わりを断たれた時を境にしてその文明は衰退の道を歩みはじめるもののように筆者には思えてならない。テームズ川、セーヌ川あるいは隅田川のほとりに花開いた文明が現在ちよう落傾向を示しているのは水際環境の質的低下に伴って川と人間との係わりが希薄になりつつあることによるものと筆者は考える。

小松の文明もまた梯川とその周辺に住んでいた人間との深い係わりを通じて育まれてきた。住民の信仰と生活のよりどころであった鎮守の森あるいはかれらの生活圏を端的に示す遺跡が梯川および支川の川筋に沿って集中的に分布していることはこのあかしである。明治二十九年(1896)の河川法成立以来、わが国において一貫して行われてきた連続堤防を築くことによる治水対策は堤内地に利用価値の高い空間を新たにもたらした反面、文明の発生と発展に不可欠と考えられる川と人との係わりを弱めてきたマイナス面を決して見のがしてはならない。

参考文献

- (1) 一級河川 梯川の現況と直轄改修計画の概要、建設省北陸地方建設局金沢工事事務所、昭和59年4月。
- (2) 山本佐一、鎮守の森、小松市自然保護協会、昭和53年3月。
- (3) 漆町遺跡、石川県埋蔵文化センター、昭和57年2月。
- (4) 北畠直順、小松天満宮誌、小松天満宮、昭和57年12月、P. 4。
- (5) 永島福太郎、奈良県の歴史(県史シリーズ29)、山川出版社、昭和55年8月、P253
- (6) 加賀 小松天満宮と梯川、小松天満宮等専門調査会、昭和60年8月(刊行予定)、中川武夫執筆担当部分。
- (7) 中川武夫、日米の環境アセスメント比較研究、第11回環境問題シンポジウム講演論文集、土木学会、環境問題小委員会、昭和58年8月、PP69-74。

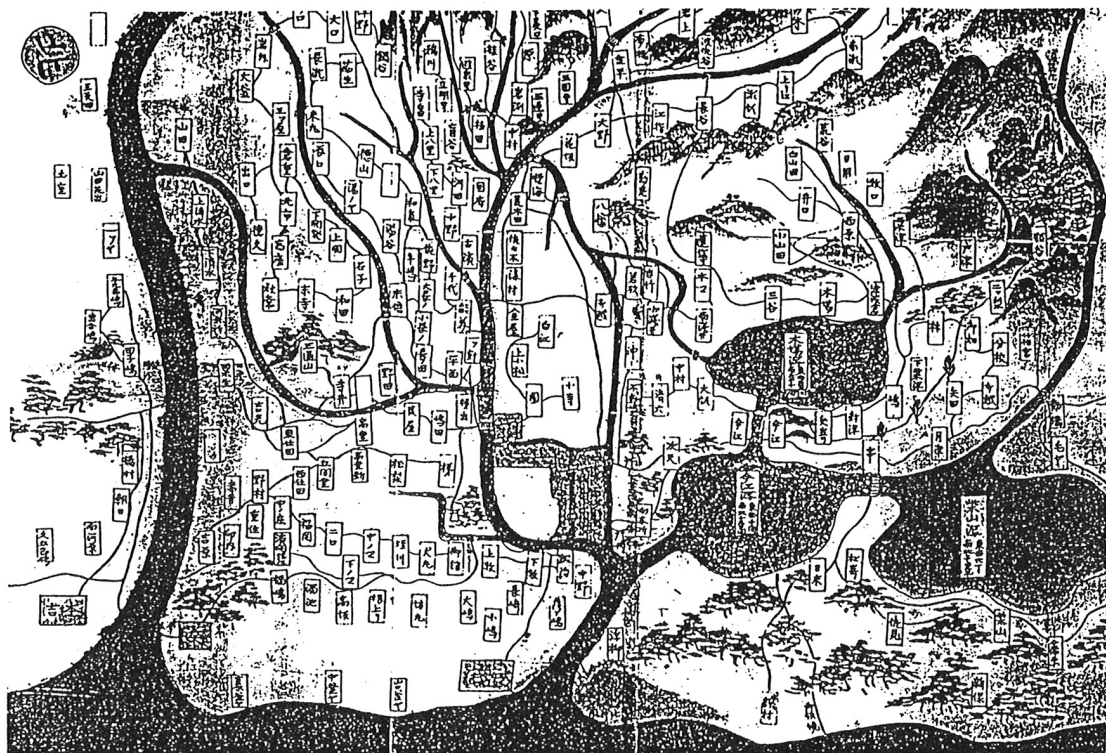


図-1 小松殿中写之（嘉永四年1851）の一部

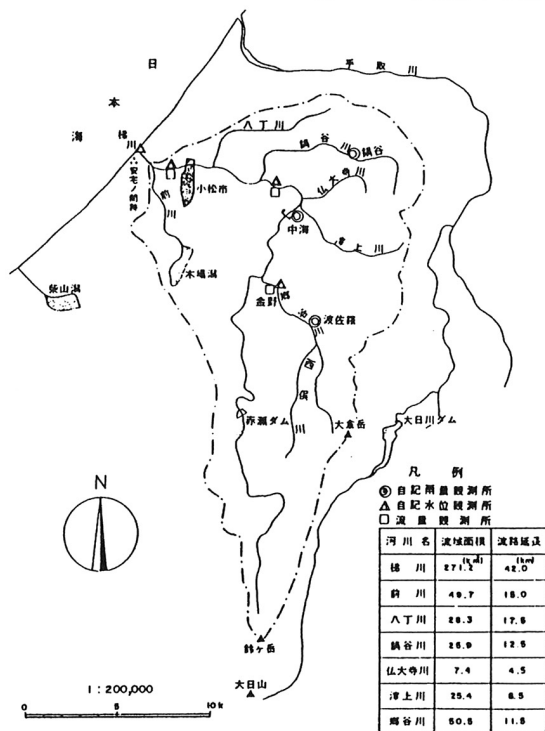
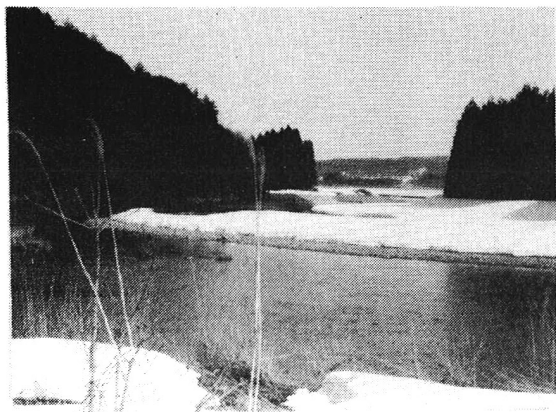


図-2 梯川流域概要図

（「一級河川、梯川の現況と直轄改修計画の概要」昭和59年より抜すい）



図-3 小松天満宮境内（撮影：中川 昭和59年3月28日）



図一 御茶用水頭首工を下流に望む（河口から約 12.3 km）
（撮影：中川 昭和 59 年 3 月 15 日）



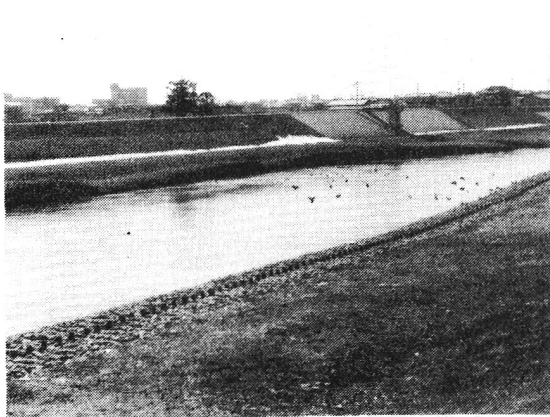
図一 八丁川との合流点付近（河口から約 4.6 km）
（撮影：中川 昭和 59 年 5 月 11 日）



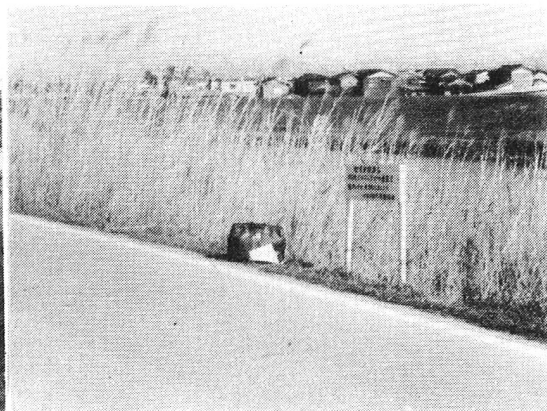
図一 佐々木町、わん曲部周辺（河口から約 8.6 km）
（撮影：中川 昭和 59 年 5 月 11 日）



図一 上牧町、右岸堤防から石田橋を下流に望む
（河口から約 2.8 km）（撮影：中川 昭和 59 年 3 月 28 日）



図一 能美町、右岸堤防から下流を望む（河口から約 6.5 km）
（撮影：中川 昭和 59 年 3 月 26 日）



図一 「せいたかよし」の密生地（河口から約 2.6 km）
（撮影：中川 昭和 59 年 3 月 26 日）

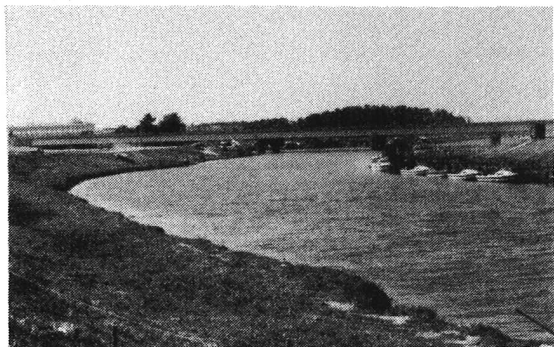


図-10 城南町、左岸堤防から梯川橋を下流に望む
(河口から約1.3km) (撮影：中川 昭和59年3月28日)



図-13 鎮守の森分布図
(・印鎮守の森所在地)
(「鎮守の森」昭和53年による)



図-11 安宅岡址
(撮影：中川 昭和59年3月28日)



図-12 佐々木町、左岸寄洲上で遊ぶ子供達
(河口から約8.4km)
(撮影：中川 昭和59年3月26日)



図-14 鍋谷川との合流点周辺の遺跡分布図
(「漆町遺跡」昭和57年による)

- | | | | | | | |
|-------------|-------------|------------|-----------|------------|-------------|-----------|
| 1.漆町遺跡 | 2.打越遺跡 | 3.若杉古窯跡 | 4.吉竹遺跡 | 56.堀田山古墳群 | 57.御書裏所古墳 | 58.河田山古墳群 |
| 5.若杉山1号窯 | 6.磯生1号古墳 | 7.釜谷古墳 | 8.河田遺跡 | 9.白江松川遺跡 | 10.針遺跡 | 11.白江 |
| 12.定地坊跡 | 13.千代オオキタ遺跡 | 14.古府シ | 15.小野町遺跡 | 16.千代城跡 | 17.千代マ | 18.磯地遺跡 |
| 19.本村遺跡 | 20.佐々木遺跡 | 21.フンド遺跡 | 22.古府遺跡 | 23.十九堂山遺跡 | 24.十九堂山中世墓群 | 25.古府古地遺跡 |
| 26.小野遺跡 | 27.スギノキ遺跡 | 28.ミヤケノ遺跡 | 29.古府シマ遺跡 | 30.古府南野台遺跡 | 31.古府横穴 | 32.堀田A遺跡 |
| 33.宮谷寺尾敷遺跡 | 34.堀田遺跡 | 35.後山神明古墳群 | 36.堀田山古墳群 | 37.御書裏所古墳 | 38.河田山古墳群 | 39.河田横穴群 |
| 40.河田B遺跡 | 41.阿古宮跡 | 42.谷内 | 43.穴場横穴 | 44.上八里横穴群 | 45.上八里 | 46.堀田塚状遺跡 |
| 47.遊泉寺クボタ遺跡 | 48.降 | 49.明寺跡 | 50.前泉寺跡 | 51.荒木田遺跡 | 52.大谷口遺 | 53.亀山玉造遺跡 |
| 54.輕面中世墓群 | 55.西芳寺跡 | 56.遊泉寺遺跡 | 57.臥生寺塚 | 58.臥生寺跡 | 59.臥生寺山古墳群 | 60.宮ノ奥横塚群 |
| 61.長寛寺中世墓跡 | 62.中海遺跡 | 63.岩間城跡 | 64.曾興寺跡 | 65.赤桶谷口遺跡 | 66.松の木谷横穴群 | 67.遊泉寺跡 |
| 68.龍ノ木山遺跡 | | | | | | |